

# CAMD セミナー

(Center for Development of Advanced Medicine for Dementia)

## アルツハイマー病への先制医療実現に向けた バイオマーカーの必要性と落とし穴

新潟大学 脳研究所 遺伝子機能解析学分野 助教

春日 健作 先生

平成31年4月18日(木) 午後4時00分～

第1研究棟 2階 小会議室

これまでアルツハイマー病(AD)に対する多くの抗  $A\beta$  抗体の臨床試験が失敗に終わっている。その理由として、臨床症状による診断には限界があり、一見ADのようにみえても脳内に  $A\beta$  の沈着を伴わない症例が存在すること、また臨床症状を呈する段階ではすでに神経変性が高度となっていることが考えられる。そこで病態のより早期の段階で治療介入する先制医療に期待が寄せられており、その実現には脳内病理を反映するバイオマーカーをもちいて最適な症例を選択することが重要となってくる。

AD患者の脳脊髄液(CSF)中では  $A\beta_{1-42}$  は低下を認め、リン酸化タウ(p-tau)は上昇している。CSF  $A\beta_{1-42}$  の低下はCSF p-tauの上昇に先行すると考えられるため、CSF  $A\beta_{1-42}$  の低下を認めるもののCSF p-tauの上昇を認めない症例が先制医療の最適なターゲットとなり得る。

しかし、われわれは、CSF  $A\beta_{1-42}$  の低下を認めるもののCSF p-tauの上昇を認めない症例の中には、AD以外の病態が一定数存在することを明らかにした。これらAD mimicを適切に除外するためのわれわれの試みを紹介したい。

連絡先：アルツハイマー病研究部  
飯島浩一（内線 6401/7505）